

## 第 138 回 Brown Bag Lunch 報告書

テーマ：一瞬一瞬を精一杯生きること

講師：有森裕子氏／UNFPA 親善大使

日時：2006 年 3 月 8 日（水） 12:30-14:00

有森裕子 UNFPA 親善大使より、「一瞬一瞬を精一杯生きること」をテーマに、ご講話いただいた。講話の要点は以下のとおりであった。

### 1. なぜ国際協力の活動をするようになったのか

私にはとても優れた兄がいました。小さい頃から兄を羨ましく思い、私もいつか自分にできることが持てたら、それを精一杯活かして生きていけるようになりたい、その何かひとつをつかみたいというのが、私の小さい頃からの夢でした。中学の時に走れるということを見つけて、その後目が出なくても大学まで走ることを続けていました。大学の時は、教員になるつもりでした。私自身に何か 1 つを頑張れるきっかけを作ってくれたのが小学校の時の体育の先生でしたので、自分もそのようになりたいと考えていました。大学 4 年の時に、3 千メートルのたった数分のタイムトライアルで自己ベスト 2 番目の記録に驚き、まだ走れる可能性があるのではないか、先が見えない夢にかけてみたいということで、リクルートの実業団に入ることを決意しました。リクルート入社が平成元年で、その後走ることを仕事として、生きる手段として走り続けてきました。その結果、バルセロナオリンピックで銀、アトランタオリンピックで銅を取りました。

ちょうどこの 1996 年は、「自分自身をほめたい」と発言した年ですが、12 月に新聞社からカンボジアに来ないかと誘われました。チャリティーレース、ハーフマラソンで、内戦による地雷で手足を飛ばされた人たちに生きる力を作ることと、義手、義足の資金支援が目的だと言われました。それ以前にもチャリティーレースには参加していましたが、海外は初めてでした。日本では見られない現状を持った国に足を踏み入れることは初めてで興味があったことと、ちょうどテレビで義肢を作る人が手足を失う人に比べて少ないと言っているのを見ていたこともあり、私は、情報だけでは満足できず、自分の目で、同じ空気の中でその現状を見ないと信じられないので、その現状が見られるのであれば行ってみようと思い、初めて招待選手として参加しました。

初めてカンボジアに入った時は、いい意味でも悪い意味でもすべてのことが衝撃的でした。身なりが貧しい子どもたちが妹や弟を抱いて物乞いをしてくるのですが、それでも子どもたちの目は、生きることに對する執念で輝いていて、とてもきれいでした。それに対して、可哀想という表情をするのが失礼な気がして、どういう表情をしたらいいのか迷ってしまいました。

マラソン大会でも困ってしまいました。マラソン大会をしても、子どもたちは応援の旗を持ってロボットのようにきれいに並んでいます。子どもたちはランナーが通ってもびく

ともしませんでした。子どもたちはマラソンにまったく興味を示しませんでした。それを見て私は、マラソン大会はこの国には必要ない、走る力があれば明日の仕事のために力を使うだろうと思い、私が来ても意味がないと思いました。これが1年目です。

よって、2年目は行きたくないと思っていたのですが、またやると言われて、しぶしぶ行きました。1997年はカンボジアの内情はさらに悪くなっていて、この状況だからこそ来てくれと言われて、私には意味が分かりませんでした。しかし、カンボジアに行くと子どもたちの変化を見て気持ちが変わりました。1年目に、子ども用のシューズやTシャツを供与したのですが、子どもたちはそれらをすべて身につけてマラソン大会前に練習していました。私はそれを見てびっくりしました。やる気も関心もなかった子どもたちが嬉しそうに練習しているのを見て、何もないだろうと思っていた自分の気持ちを恥ずかしいと思いました。何もならないと思っていた、たった一つの走るというスポーツが、この子たちに何かを残した、生きるための大事なパワーを何らかの形で作ったということ、子どもたちの姿から感じました。ならば、自分はスポーツをずっとやってきた人間で、自分がずっとやってきたものを、このような形で最大限活かすことができるのならば、精一杯活かしていきたいと思いました。そのために、人間は自分ができることを持つのだろう、ならばそれを使わないといけないと思いました。その当時一緒にカンボジアに行っていたランナーの人たちとも意見が一致して、NGOのハート・オブ・ゴールドを、体育の日にちなんで、平成10年10月10日に立ち上げました。その後は招待でカンボジアに行くのではなく、自分たちで自発的にカンボジアに入るようになりました。ハート・オブ・ゴールドは、スポーツを通じて、人間の生きる力、喜ぶ力を促すきっかけを作ることを目的とし、最終的には自立支援を目標としています。

以上が、私が国際協力の活動をするようになった経緯です。走ることからポンと抜けてこの活動に入ったのではありません。自然な成り行きです。小さい頃の夢だった、自分が持てたものを最大限に活かせる場所があれば最大限に活かしていこうということが、たまたまカンボジアでの活動で実現できたということです。なお、ハート・オブ・ゴールドのスローガンは、「できることをできる人ができるかぎりやろう」です。

## 2. ハート・オブ・ゴールドの活動について

毎年カンボジアに入り、マラソン大会を中心に活動を続けています。集まるお金はすべて義肢の資金と障害者陸連に行きます。地雷で手足を失ったたくさんの人たちが、生きる手段としてスポーツを始めています。カンボジアでは、地雷で手足を失くしたのは、前世で悪いことをしたからだと言われることもあり、手足を失った人たちは人前が出るのが恥ずかしい状況になっています。一時期、彼らを完全隔離するための、ハンディキャップビレッジまでできました。このような、非常に間違った方向からの考え方、見方で差別を受けている彼らが、少しでも早く自立をし、世の中にみんなの前に出ていけるようにと、スポーツを通じて勇気と力を持ってもらおうとしています。マラソン大会には、車椅子でも義足ランナーでも走ることができます。みんなの前で走り、自分の力を見せることは、彼

らにとって生きる力をつける大きな手段となります。

マラソン大会は昨年 12 月に 10 年を迎えました。マラソン大会と平行して、5 年前から、マラソン以外のスポーツを取り入れた活動も始めました。マラソン大会の前日に、スポーツの祭典として、運動会的な形で始めたのですが、サッカー、バレー、バスケ、レクリエーションの 4 つのスポーツを対象として、日本国内のオリンピックやプロとして指導していた経歴を持つ人々に声をかけて現地に入ってもらい、日本の指導者が現地の先生たちに、子供たちへのスポーツ指導の仕方を教えています。カンボジアでは、内戦で指導者や教育者はほとんど殺されてしまっています。日本の指導者から指導を受けた現地の先生たちは、翌日、日本の指導者が見ている中で、子どもたちにスポーツを教えています。このように 2 段階に分けた指導者育成プログラムを、指導者があまりいない田舎を中心に、毎年場所を変えて 5 年間やってきました。

嬉しいことに、カンボジア政府、スポーツ省の人たちが、人間の育成にはスポーツが欠かせない、スポーツのルールを学ぶことで日常生活のルールが学べる、スポーツを通じて楽しみながら、子どもたちが生きていくための基本的姿勢を学ぶことができるということを理解してくれました。カンボジアには中学校からの体育の指導要領はあるのですが、小学校の体育の指導要領がなかったので、それを作りたい、教科書づくりを手伝ってほしいと、ハート・オブ・ゴールドに話をしてきました。ハート・オブ・ゴールドは小さな団体ですので、JICA に申し出て、JICA の草の根技術協力の委託事業として、筑波大学の専門の先生たちと、JICA と、ハート・オブ・ゴールドで、カンボジアの教科書づくりをサポートすることに今年決まりました。今、その作業を始めたばかりです。一時期、スポーツでの国際援助は情操教育ということで取り上げられなかったのですが、これからはいろいろな援助と平行して、スポーツに関する活動はとても必要になってくると思います。

### 3. UNFPA での活動について

ハート・オブ・ゴールドで活動していた 2001 年、UNFPA から親善大使にというお話をいただきました。カンボジアではエイズ問題でも活動してもらいたいと言われ、自分はこれまでスポーツの視点でしか見ていなかったの、見えている部分が狭いのではないかと、別の視点から見たら、これまでやってきた活動の視野が広がるのではないかと、より一歩前に進める、自分を活かせることが増えるのではないかと考え、2002 年 1 月に UNFPA 親善大使を受けることにしました。

2002 年から、カンボジア、タイ、インド、アフリカ 2 箇カ所の、いろいろなところに行かせてもらい、この仕事のチャンスをいただいてよかったなと感じています。メダルを取った時にも頑張ってきてよかったと思ったのですが、余り意識していませんでした。しかし、カンボジアに入った時には、自分でも本当に走ってきてよかったと思いました。走っていなかったらカンボジアに出会えなかったし、UNFPA の活動もなかったからです。UNFPA の活動では観光で見ないところに行くのですが、現地の人と話ができて、今の世界で起こっていることを現場で生で知ることができる、感じるということはなかなか望んで

もできないことなので、私自身こういうチャンスをもたらえたことを感謝しています。

UNFPA の活動についてですが、UNFPA は人口問題を扱っている機関で、特にリプロダクティブ・ヘルス/ライツ（性と生殖に関する健康/権利）に関する仕事をしています。日本ではそれほど考えなくてもいいことですが、今回私が行ったエチオピアのようなどころでは、子ども一人産むにも自分の意思で決められない、専門の人もいない、子どもが育つための栄養もない、母体が危険にさらされるといったことが、当たり前のように起きています。私の主な仕事は、現地でそのような現状を見て、思ったこと、感じたことを日本の人々に伝えていくことです。

最近訪問したエチオピアには、いくつかのテーマを持って行きました。1つは、FGC（女性性器切除）です。男性の割礼と同じ意味で続けられてきた文化、慣習です。非常に難しい問題です。切除ですから、男性の割礼とは比較にならず、女性の体に痛手と害を及ぼします。親が決めるのですが、早い子で6歳頃、行われます。処女性を守ることを目的としていて、女性に悪いことをしてやろうという意味はありません。ただ一つ、理由の中に否定できるものとして、「神は女性にだけ汚いものを1つつけてしまった。だから取らなくてはいけない」という、女性性器が汚いものとして切除されてきたという説があります。女性の大切なものが汚いものと表現されているのは、今後否定していかなくてははいけないと思います。切除の理由に否定できるものがあればいいのですが、否定できるものがないと、FGCをとめるには、ものすごく長い時間と根気のいる活動が必要になってくると、私は認識しました。FGCは文化、慣習として、女の子の成長に良いとされてきた行事の一つです。国内の人がFGCに対して疑問を唱えたのではなく、FGCの慣習について知った国外の人が良くないことだと主張しました。人は誰でも信じてやってきたことを他人からやめるように言われても、なかなかやめられないものだと思いますが、FGCについても同じです。最終的に私が気づいたことは、私たちの活動は相手のしてきたことを否定してはいけないということです。自分の国ではないところに入って、自分自身にはなかった慣習や文化を見て、自分たちの価値観に当てはまらなくても、否定してしまったら活動は進まないことを学びました。同時に、否定するのではなく、これまで情報がなくて学ぶことができなかったことを現地の人々に提供し、「この方法はこうだから別の方法はどうか」といったヒントを出していくような、時間のかかる活動をやっていかなくてははいけない、これが援助の基本なのだと思いました。

もう1つのエチオピアでのテーマは、フィスチュラ（産科ろう孔）<sup>1</sup>です。フィスチュラの治療が行われている病院を訪問しました。フィスチュラは100%治る人もいます。しかし、重症の人は、傷口自体は治っても歩行が困難のままであるなど、生活に支障をきたします。

---

<sup>1</sup> 膣、直腸、膀胱、腹腔、子宮など、産科に関連するいずれかの器官がつながったり、孔（穴）があくことによっておこる女性の疾患で、慢性的失禁などを伴うことが多い。難産や、適切な産科ケアを伴わない出産・人口妊娠中絶、女性性器切除、性感染症などにより生じる。慢性的失禁などのため、患者は社会的疎外や差別を受けることが多い。日本でも明治時代ころまでにはあったとされる疾病（UNFPA 東京事務所ウェブページより抜粋 <http://unfpa.or.jp/5-2.html>）。

フィスチュラになるのは、早婚が主な原因です。エチオピアでは、女の子が 11~13 歳の間で親が結婚を決めます。初潮があり子どもができると分かった時点で、性行為をし、15 歳手前で妊娠します。そうすると、胎児の大きさに対して、その年齢の女の子の骨盤は小さすぎるとい状況になります。その状況で女の子は、小さな骨盤の中から子どもを産まなくてはいけなくなります。それもきちんとした施設もなく、子どもが出てくるまで座った（しゃがんだ）状態で、ひどいときは 10 日間ぐらい座ったままの状態です。かなり体に無理が行き、また、胎児が骨盤から出てくる時に胎児の頭などで骨盤の上の部分の神経や血管が傷ついて、別の穴ができることがあります。この穴ができた状態をフィスチュラと言います。フィスチュラの一番の問題は、神経を傷つけることです。何日も座り続けた女の子は体と精神を壊し、子どもも無理な出方をするのでほぼ死んでしまい、女の子はフィスチュラになってしまいます。その女の子の一生は、いままではその時点でほぼ終わりでした。神経が切れて穴があいていますから、意識的に排尿・排便ができません。ずっと垂れ流しの状態です。ですから、ものすごく臭いがします。子どもが産めずフィスチュラになったことで夫には離縁され、実家に戻っても臭いがあるため、敷地内に別の小屋が建てられてそこに隔離され、一生を過ごします。子どもは二度と産めません。そういう状況の女の子がたくさんいます。

そうした事態を知った、オーストラリア人のキャサリン・ハムリン医師とその夫のニュージーランド人、レジナルド・ハムリン医師（故人）は、オーストラリアの援助でアジスアベバに病院を建てて、フィスチュラに対する手術を行いました。現在、300 ドルの資金があれば一人の手術ができると言われていています。しかし、精神的に手術を受けられない状態で来る子どもたちもいます。一番困るのは、精神が壊されてしまっていて、立ち直れないことです。病院に来るほぼ 100%の女の子が自殺を考えたことがあると言います。まずは精神のケアを行い、再び夢を持てるようにして、手術できる状態にします。また、中には足が曲がった状態の子もいるので、足をまっすぐに伸ばすというリハビリから始めます。病院には若い女の子たちがたくさんいました。印象的だったことは、手術を受けた女の子が、手術した部分が乾いて治った時に、先生と手を握って喜んでいました。なお、国際機関として、最初にフィスチュラに対する支援をしたのは、UNFPA だと聞いています。私自身も、フィスチュラに対する支援を続けていきたいと思っています。

エチオピアでは、ランナーだと言うと、熱いもてなしを受けました。エチオピアも含めてアフリカでは、サッカーやマラソンなどのスポーツ選手は、尊敬され期待されているメッセンジャーです。私はマラソンができるということを活かして、最大限この国の人たちと活動したいと思いました。エチオピア国内の UNFPA 親善大使であるアテネの 5 千メートルトラック・金メダリストのメセレト・デファルさんとアジスアベバ大学の構内で、学生たちと 2 キロのマラソン大会をして活動のアクションを起こしてきました。

#### 4. 終わりに

このような感じで、私はこの仕事を、自分の人生において出会えた素晴らしい役割だと思っています。私自身が必死にやってきたことが最大限この活動で活かされるのならば、それが私自身のやるべきことだと思っています。

私は、専門的な知識を持って活動している人は限られていると思います。ゆえに、一般にもっと多くの人たちが援助活動をやっけていこうとした時に、それぞれの人が自分にできることを何か見つけて持っていることが重要だと思っています。自分にできることを持っていれば、それを援助活動において活かす方法を考えて行えばいいと思います。それが、援助活動の一番の力のもとになると思います。

私たちは、かなりの学生ボランティアを現地に連れて行って、いろいろな現場を見て感じる機会を作っています。私が学生に言うことは、「まずは自分の生き方をしっかり見つけなさい。そうでない人が人の生き方に関わるな」ということです。自分のことを必死に考えない人が、人のことを必死に考えることなどできるはずがないと思うからです。自分自身をしっかり愛して、生きていることを最大限喜び、自分自身の生き方を見つけてから、人には関わるべきだと思っています。

私はまだマラソンランナーとして現役です。そろそろ年齢的な区切りも来るので、今年、来年一杯でマラソンランナーを引退しようと考えています。無事に引退できたら、よりこちらの活動を今までの生き方を通してフォーカスをあててやっけていこうと思っているので、その時はまた応援してください。